

No. 142

全 仏

1 / 44.



表紙説明

表紙の揮毫は新年にあたって、現会長東本願寺大谷光暢台下のご染筆をいただいた。「無倦」とは親鸞聖人作正信偈の一句で「大悲倦きことなく、常に我身を照すなり」のお言葉である。われわれは、常に仏の光明に照らされて幸せな明るい一年をおくりたいものであるとお気持であらう。

年頭雑感

全日本仏教会

理事長 来馬道断

新しい年を迎え過ぎし一年を顧みて、吾々に最も身近かな、そして最も関心の深かった問題は、所謂全学連の行動であったと思う。最初は学園内の問題から出発して学園の内外に闘争の規模を拡大し、遂に騒乱事件にまで発展した。警察庁の予想では、本年は革新団体などとの共闘も考えられるから、一層激化するだろうという。青年は元来意気と情熱に燃えるものである。

従って彼等の一途な行動も、その真剣さのみは認められぬこともない。然し彼等が彼等なりに理解するイデオロギーを金科玉条とし、自己の意志を貫徹する為には、国家の規律も社会の秩序も無視して憚らないという態度は、あくまで排撃されなければなるまい。

この様な風潮は、近代文明の特徴であると言われる。たしかに近代における物質文明の驚異的発達によって、精神的なものはすべて後に取り残され、道徳も宗教もその光り地に落ち、人間は魂の拠りどころを失って右往左往しているのが、今日の社会の実情である。特に戦後の激動期に当って輸入された民主主義が、何ら咀嚼されない生硬のままに日本の教育に採り入れられ、これに学園の自治などという刺激剤まで加わって、学生を独善

から狂信へ、更に暴走へと駆り立てているようである。

今日のかかる病弊は世界的のものであり、しかもその源は西欧に発し、西欧に発達したものであるから、これを救うものは仏教以外にはないと言われる。果してしからば、日本の仏教界は、先づかかる重大問題に対処する体制を整える必要がある。

万国博に参加の意義について

昭和四十五年にアジアにおいて、最初の万国博がわが国で開催されることになり、それに全仏が施設参加することになったのは、まことに意義深いことであります。

特に、そのテーマが「人類の進歩と調和」とさされておりますことは、我々仏教徒にとりましては重要な意味をもつことと考えます。

仏教の意図するものが「転迷開悟」即「抜苦与

ろう。日本には宗派はあるが仏教はないと言ったものがある。勿論それは半ば揶揄的な言辭にすぎないが、一面の実状を言い表わしている様にも思われる。というのは、仏教各宗派及び各団体を統合し、日本の仏教界を代表する筈の全仏が、その大部分の経費を宗派に依存しているので、常にその意向を顧慮しながら活動を続けている現状だからである。しかし仏教徒の奮起を要望する声の、今日ほど大なるはない事を思うとき、時勢は、全仏がかかるとは姑息な機関であることを許さないのでないか。殊に全仏の役員は、各宗派等傘下団体から選任されていることであるから、全仏をして一層強力な全一仏教運動を展開させる為には、傘下団体の親身の協力と支援を懇願する次第である。

常務理事 豊原大潤

楽」であるとすれば、仏教、特に日本の仏教が全人類社会に対してなすべく、又日本の社会国民に對しても、その進歩と調和の上に如何なる仕事をして来たか、しつとあるか、今後如何になさんとするかを回顧し、観察し、企図することは重大な問題であります。申すまでもなく、人類の進歩の為には重要な条件が整わなければなりません。私には、人類の特徴として聞き習っておりますところ

の、「言葉をもつ」、「道具を作る」、「火を使う」の三つの特徴は、人類の生命の大切さを護り進展させる上での、他の動物と違った特質であると思ひます。然し現実には、それらのものがどう働いているかを考えると、一つは自分の一種族の欲するものを入手し或いは達成せんとする能力となつて現われ、一つは自分を、人類を包む諸種の条件―時、所（自然、外界）、人間関係等の周囲を正しく有意義に受け取つてゆく能力として働いていると思ふのです。その求めてゆく力と受け取つてゆく力が、人間にあるという事によつて、人類の進歩や調和が図られてゆくと考えますとき、又求めてゆく力と受け取つてゆく力が、一つは科学的方向に一つは宗教的方向に発展してゆくものと思ひますとき、この二つの関係如何が政治、経済、法律、道徳、芸術等を大きく左右すると思ふのです。事実、科学的方向の進歩と宗教的展開如何が、人類や国家社会の生活史に実に大きな影響を与えていることを想起されると思ふのです。近代になつて科学の世界の進歩は、人類に如何なる影響を与えたか、そしてそれが宗教界に如何に影響したかは、宗教対科学の直接の問題であると共に、その二つの間にある他の政治その他の諸項に影響し合つて、人類の進歩調和或いは平和繁栄が実に重大な被影響下にあることを思はずにはいられません。

昨年、明治改元百年として色々と祝賀や記念行事が行なわれました。然しその百年間の歩みにはどういふ実質があったのか、形の上では近代国家となり、所謂文化国家的に著るしい発展を遂げたと言われますけれども、大切な人間の持つ二つの力の面から見ると、それは人間の生命の維持

発展の上での前記の欲するものを求めてゆく科学的能力と、人類を包む諸種の条件を正しく受け取つてゆく純正な宗教的能力との争ひであり、後者の不振の歴史であつたと思ひます。事実明治の初頭に行なわれた排仏棄釈の問題は、文明開化なる言葉の意味する科学的文化への屈従が招いたものと思ひます。然し乍ら科学文化、物質文明の進歩は、人間が「抜苦与楽」、「転迷開悟」を外界にのみ求める限り科学的進歩はいよいよ限りなき足取りを示すと思ひますが、それは又他の一つの特質である宗教的分野の後退を意味するものである時は、真の意味の人類の進歩と調和は考えられないといわねばなりません。

万国博への米ソその他の発展は大いに科学力を誇示することでしょう。それを又政治や経済の上で大きく役立せようとするでしょう。日本の参加者も大同小異といえましょう。はたしてこれでよいのか、顧みる長き過去の日本の進歩の上で、日本の仏教は如何なる役割を果たしたか、今日の日本の社会生活面に現在の仏教界は如何なる役割を果たしているのか、仏教本来の「転迷開悟」という―或いは「抜苦与楽」という面から、人類の進歩と調和という上に如何なる指導性と意欲情熱を持っているのか、これをアジアで始めて行なわれ恐らく数千万の外人の来るであろうこの万国博に如何に主張するか、これこそ我が全仏の持つ大きな問題でなければならぬし、全仏が仏教者として全人類に主張し、又科学的分野のほかに人類にとつて怠つてはならない重大不可欠な世界のありることを、改めて考える事への提起であらねばならないと考えます。（浄土真宗本願寺派総長）

謹賀新年

全日本仏教会

会長 大谷光暢
副会長 長岡慶信

理事 出口常順
山田靈林
来馬道断

常務理事

杉谷義周・草繁全弘・上野頼栄・小野塚潤澄
華山恵光・山田義道・宮前鳳洲・小林大巖
鶴飼隆玄・豊原大潤・下川弘義・訓覇信雄
竹内良恵・片山日幹・栗本俊道・高橋隆天
松村寿願・村瀬良彦・浅野真明・山本 杉
松本徳明

理事

清水谷孝尚・吉田秀映・岡野正道・味岡良戒
立部瑞祐・後藤憲巖・森本三鎰・高辻恵雄
稲葉是清・佐々木近衛・山中浩文・倉持秀峰
熊野龍夫・安藤寿雄・奥 博良・間野敬重
佐藤覚雄・蒲池 繁・中山理々

監事

春山 定・野口有興・船口暉子

明治百年に当り聖徳太子を憶う (完)

和宗管長 出口常順

横 額 師は明治三十三年生
れで、当年とつて六十八才。京
都帝国大学哲学科を卒業。昭和
七年から九年にかけ英・仏・独
に留学。四天王寺復興局宮繕課
長・天台宗教学部長・大阪府仏
常任理事・四天王寺副住職・執
事長を歴任し、現在、和宗管
長・四天王寺管長・全仏副会長

を知って、日本は非常に礼讓の厚い国だと彼らが
いっていますが、その通りだと思つたのでありま
す。
それから翌年の推古十二年の四月の三日には憲
法十七条をおつくりになりました。これは今日日
本書紀にそのまま全文が載せられておりますが、
非常にりっぱな明確な文章でありまして、その文
章におきましてもあらゆる支那の書をお読みな
なつて、それらの文字をそのまま巧みに利用されて
自己の説を堂々と述べられ、天皇の權威を高め、
日本の国体を明徹にいたしました、臣としての使
うべき正しい道をはっきりと書いておられる、根
本のものであります。

聖徳太子は推古十一年に冠位十二階をおつくりになった。これも隋の歴史にも書いてありますが、外国でも聖徳太子が冠位十二階をつくられたということを知って、日本は非常に礼讓の厚い国だと彼らがいっていますが、その通りだと思つたのであります。それから翌年の推古十二年の四月の三日には憲法十七条をおつくりになりました。これは今日日本書紀にそのまま全文が載せられておりますが、非常にりっぱな明確な文章でありまして、その文章におきましてもあらゆる支那の書をお読みななつて、それらの文字をそのまま巧みに利用されて自己の説を堂々と述べられ、天皇の權威を高め、日本の国体を明徹にいたしました、臣としての使うべき正しい道をはっきりと書いておられる、根本のものであります。

その聖徳太子憲法の一番大事なことは、何と申しましても第一条にあります「和を以て貴しと為す」というご精神であります。この「和を以て貴しと為す」という精神は、おそらく世界におきまして今日もお生き生きとして、万古に通ずる金言であろうと思つてあります。何となればわれわれの平和と幸福というものは、この和の精神が実現されてこそ初めてできるものであります。平和と幸福はだれしも望むもの、そこでどうしたら平和と幸福ができるかということにつきましての根本理念が、聖徳太子は明らかに「和を以て貴しと為す」という和の精神として述べておられるのであります。上の者も下の者もともに相むすみ合い、相解け合つて平和のうちにお互いに意見を交換してものを考えていったならば、どのようなこと、どのような理論におきましても正しい理論が得られる。そこにこの正しい決定が見られる、どのようなことでも必ず成就する。もしもこの和の精神が実現されないのでお互いに徒党を組んで、お互いに相対立して話し合ひの場をつくらなかつたならば、互いに争ひ、隣人が相はむことになり、兄弟同志がけんかをしなければならぬ。親子が相争わなければならぬ。しまいに君臣の分にもさかのぼり非常に悲惨な結果になる。だからこの和の精神は何といつても必要だということをおいっておられます。今日万世のために泰平を開くという考えを実現するためには、何と申しま

ち瞋（いかり）を棄てて、人の違ふことなかれ。人皆心あり、心各執あり。彼是とするとき則ち我非となし、我是とすれば則ち彼非となす。我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚に非ず。共に是れ凡夫のみ。是非の理、たれか能く定むべき。相共に賢く、相共に愚かなること、鑿（みみがね）の端（はし）無きが如し。是を以て彼の人が瞋（いかり）と雖も、還（かえ）って我が失を恐れよ。我独り得たりと雖も、衆に従ひて同じく挙（おこな）へ。こういふおことはございますけれども、これは最も民主主義に徹したことだろうと思ひます。お互いが議論をする。自分が非常にいいと思う。そうすると相手は非常に悪いことになる。お互いにそう思う。しかしながら自分は必ずしも聖人じゃない。自分は必ずしも絶対に正しいということはない。彼も賢いことをいう、自分もそうだと思う。また彼も、わしはひょっとして間違っているかと思う。わしもひょっとしたら間違っているかと思う。お互いに相対的なことになりす。だからともに私たちは凡夫なんだ。どっちも聖人じゃない。そこで私たちは彼が怒った場合、ひょっとしたら自分が間違っていないか反省してみよう。これは絶対間違いない、彼がみんな間違っているかと思つても、十人寄つた八人までがいいといつたら、その意見に従ひましょう。こういうふうにしなればいけない。支那でも同じですね。「十目の見るところ、十指の指さすところそれおごそかなるか」と申しております。みんながこれはよろしいといつたら、それは世論なんです。民主主義はそういうものなのです。みんながいいといつたら従わなければならない。これが民主主義の根本だろうと思ひますが、聖徳太子はすでに

そういうことをはっきりと憲法の中に、民主主義の根本の議論のしかた、話の場を持って、しかもそれは自分一人いいというわけではない。彼もいいことをいう。そうして自分が非常にいいと思つてもみんながいいと思つたときには衆に従つておやりなさい、いったん決定したものはもうぶつぷついわないで一生懸命その道に従つてやれといつておられます。これは今後民主主義を行なつていく日本人として、聖徳太子憲法はどうしても私たちは考えていかなければならないと思うのであります。第十五条には「私を背き公に向ふは、是れ臣の道なり。凡そ人、私有れば必ず恨有り。恨有れば必ず同ぜず」何か自分が私心を持っておりますと、いつかはきつと私を恨んでくる。恨んできても足を引きつ。そうすると事を行なおうとしてもできない。「私を以て公を妨ぐ」とありますから、自分が事を行なうことはできないから、公のりっぱな仕事ができないようになります。だから私心を持たないで天下国家、社会国家のことを先に考えなければいけない。あるいはみなさん方の職場では、職場のことを先に考えなければならぬ。家にあつては家がどういふふうにならぬかということも先に考えなければいけない。そういうふうにならぬことを考えないで、まず公のことを考えよと聖徳太子はいつておられますが、これも民主主義を行なつていく上において非常に大切なことばであると思ひます。

また十七条にも「大事は独り断ず可からず。必ず衆と共に宜しく論ずべし」国家の大事業というようなもの一人ではやってはいけません。みんなだ議論をせよ、そしてみんなが合意するところへおつていかなければならないといふふうにしておられます。こういう点をご覧になりましたも千三百有余年前にお書きになった憲法が、いかに今日の民主主義を行なつていく上において、今日なおそのまま生きて、教えておられるかということをお私たちはこの機会において反省をしなければならぬと思つております。

それで最後に明治百年にあたりまして、私たちがいま新しく考えなければならぬ。将来大きく飛躍するための踏み台が必要であります。真の日本の文化というものは、はるか昔から連綿として現在のわれわれの日本人の中に入っている。それは大きなエネルギーとなつて日本人の中にあるんだという誇りをもつてよろしいと思つてあります。いにしえのことを考え、将来のことに大いに役立てていかなければいけない。今後民主主義を真にいいしていくならば、聖徳太子の精神をもつともっと生かしていく必要がある。

三段飛びという競技がありますが、これにたとえていいますならば聖徳太子のときが第一のホップ、それから明治維新になりまして第二ステップの場所である。明治百年の戦後二十年を経た今日におきまして、第三の段階に日本は立っている。それゆえにいま日本人はこれらの過去の精神、明治のことも考え、聖徳太子のことも考え、そうしてそのうちで誤つたことは全部正して真日本の民族主義というものをここに立てていかなければならない。世界の中で東西がよく融合、理解をしてりっぱな平和をもっているところの日本は、少なくとも世界の指導者の立場をとつて、いわゆる万世のために泰平を開くという精神を打ち出していかなければならないと思つてあります。

昭和44年1月1日

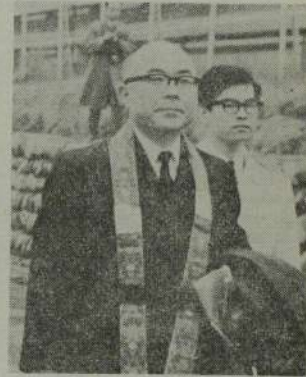
の脱皮

土台にして――



総務専門副委員長

白川良純



明治百年は、仏教界にとって廃仏百年の歴史ともいえるであろう。

明治初年の廃仏毀釈は、仏教界に決定的な影響を与えた。明治二十年代にいたって、井上円了の仏教活論や真理金針に端初を得て、いささか自信を取り戻し、その後いくたびか新しい仏教運動も試みられ、西洋的な科学思想の行き詰りを打開するために、仏教を省みる必要があると叫ばれているものの、大勢の上では、仏教が国民の精神から遠ざかってしまったことはたしかである。

最近、家庭や社会の秩序やまとまりを破壊するような傾向もつよくなり、近代の人間疎外が、今までとは全く違った人間を生み出していることを痛感させられる。

こういう状況のなかにあって、仏教界だけが、旧態依然として、ただ形骸を保つために汲々としていてよいであろうか。

正しい仏教の精神が見失われている今日、仏教界は新しい時代の光りとして、真実の正法を明らかにして行かなければ

ならない。

時代がいかに変わろうとも、人間がよるべき真実の法に变りのあるはずはないが、法は人によって運ばれるのであり、人なくして法の輝きはしない。仏教界が、余りにも古色蒼然とした古いしきたりに捉われ、身動きもできないような、硬直の状態に陥っているようでは、到底新しい時代の要求に答えることはできない。今日は、組織の時代であるといわれる。巨大な社会機構のなかにあって、個々人の力は余りにも弱い。組織の力によって解決し、対処しなければならぬ多くの問題がある。仏教界においてもまた、そういう性質の問題が少なくない。

仏教に限らず一般に宗教は、個人の内的な心に深い根をもつものであり、何にもまして個人の立場が重んぜられなければならないのは、当然のことながら、仏教界は余りにも組織的な力を發揮していかないように思われる。

もっと、組織力によって、新しい問題に対処して行く姿勢がなければならぬと感ずる。

明治以後は、とくに急激な産業の発達に伴い、あらゆる企業が全く変貌を遂げているのに比べて、仏教教団が、組織としての弱みを持ちながら、今日もほぼ昔と同じようなしきたりを保ちながら存続しているということは、不思議な位に思われるが、廃仏やあるいは仏教を蔑視する一般的傾向にも拘らず、大衆の心の底には、仏教に対する同感の情が流れていることを示しているわけであろう。

この事実を深く考え、歴史と伝統をほんとうに活かして、素漠たる現代生活に、少しでもうるおいをもたらすとともに、何にもまして人間として生きる道を

しっかりと明らかにして行くことが、仏教界の責務でなければならない。明治百年の歴史を省みると、仏教界においても日本の近代化に対応すべく、多くの努力が先人によって積み重ねられて来たことは事実であるが、今日のように急激な変化をしている社会のなかにあっては、仏教界もつねに脱皮に脱皮を重ねて行かなければならないであろう。それこそ、固定的な観念を排除し、執着の心から解放されることを願う、仏教的精神の如実な現われとなるのであるから、仏教界がつねに努力をして行かなければならないことである。

謹賀新年

福井県吉田郡永平寺町

貫首 佐藤 泰 舜

副貫首 山田 靈 林

監院 宮崎 文 輝



世界教仏

—明治百年を

組織専門委員長

鈴木敏範



昭和四十三年十一月十六日の朝日新聞夕刊一面の今日の問題の欄に葬式の改革なる一文が載って居る。その内容は葬式を改革する会を（この会の提唱者は稲田務京都大学名誉教授同紙十一月十九日朝刊五面、人としての意見）話の軸に論者の主張「今の命を精一杯生きることが極楽往生につながる」と単純素朴に考えた「と結んで居る結論には問題はないものの文の途中に「一部に見らるる葬儀屋僧侶を軸とする商業主義に毒された葬式」と有る。世の識者なるものを含め広く我國の現状では、僧侶寺院仏教を葬式と法事の為のみのものといった認識が根強いようである。たしかにその様な印象を与えて居る。脱皮すべき点は、かくその一点に集約されて居ると云えよう、即ち葬式や法事が無ければ必要ない存在となる僧侶寺院仏教、ではなく日々の日本人の生活と切り離せないものとしての仏教であるべきが理想像で、かかる方向に向っての脱皮でなければならぬ。仏教界は今こそ脱皮して日本人の心の奥底にある仏心を明かにする事が昭和元禄と

云はれる頹廢的な今日の世相を正し明るい日本をつくる礎となるものである。

仏教は世界で最も秀れた宗教であるのみならずあらゆる宗教哲学を綜合し包含した宗教界のデパートとも云ふべきものである。（キリスト教の救済教としての面を浄土門の一部にみる事が出来る筈）仏教は秀れた偉大な宗教である（云う事は各宗派を通じて各僧侶が先ず腹の底にしっかりと信念としてたたき込んでおかねばならない。この確信が無いと仏教界の脱皮は難かしい。

廃仏毀釈の中から明治の仏教界はいち早く立直ったのも其の根底には不動の信念として仏教に対する帰依と秀れたかけがえの無い宗教であるとの誇りがあったからである。

近代仏教は実にこの廃仏からいかに立直るかに其の努力がかかった。そして絶対主義改権による仏教再編成策に積極的に参加して、近代化への努力をするかあるいは廃仏毀釈は仏教の墮落それ自体が招いたものとして自戒と云う型で仏道の回復に励むかと云う二本の路線が生じた。宗教史三四四頁吉田久一氏出版「今日の状況は精神的な面では明治のその頃よりはるかに厳しい点もある。そこで各僧侶は先に述べた仏教に対する強い信念を持ち徹底的に自戒して世人の指標となるか或は社界的活動の中に僧侶としての特色を生かして仏教が生きている有様を世人に知らさなければならぬ。明治仏教脱皮の第二の型を現代的に実践することが必要である。次に仏教は普遍的なものであるから国民を啓蒙する必要がある、各宗各派の教義にとらわれると普遍性を失ない個別的な特殊性が強くなるからあくまでも全日本仏教会を中心に慎重に研

究し全一仏教運動を興隆させなければならない。明治仏教の第一の型は現代ではこの全日本仏教会及び実際政治を指導する理念として仏教をとり入れさせようとする方向での仏教徒政治同盟と云う型で存在すべきである。組織に依る力こそ現代社会に生き抜く最大の方法である。私は全日本仏教会が宗派中心の組織から地方の仏教会を中心とした組織に変容して行く事が必要であり地方組織を強固にする為にも又仏教会の脱皮の為に最大公約数を求めこれに依り全一仏教運動を強力に推し進めるべきであると信ずる。神奈川県仏教会の一億円財団とそれによる布教教化といった方向は地域仏教会の理想的なあり方を示すものであるまいか。

明治百年僅か一世紀前には日本の仏教会は至難時を乗り越えて興隆しているのであるが今日の我々は明治の遺産の上ただ坐して居るのみであってはならない。僧侶各個人の決意と努力と信念の上に立って全日本仏教会の果すべき責務の重大さを全仏の役職員各位に再認識していただきたい。仏教徒の先頭を切って研鑽し又自ら脱皮し強い指導力を發揮する全日本仏教会、其の強力な組織を望んでやまない。与えられた紙数に限りがあるので具体的な論議をなし得ず問題提起のみで擲筆することを御寛恕いただきたい。

賀正

千葉県仏教会

文化専門委員長

真 浄 義 貫



仏教界の自己批判

毒舌漫画家近藤日出造が、或るテレビ番組で、某宗派管長と対談し私は五十才を越すこの年になって、友人の葬儀でお寺に行つたことはあるが、自からの必要から一度だつて寺に出かける欲求を感じたことはないと言つていた。これは必ずしも毒舌家の毒舌とばかりとは言えないのではないだろうか。一般に寺とか、仏教界とかいう世界に対しては全く無関心である。古刹名刹への関心なども信仰から来るものではなく文化財、或は古美術観賞の対象としている場合が多い。観光寺院という言葉は正にこの間の事情をよく物語っている。このような風潮はわが国だけではない。コペンハーゲン大学で仏教を講じている藤吉慈海教授からの近信によれば、ヨーロッパ各地の教会でも、日曜日には五、六分の入りだが、平日は閑古鳥が鳴いているという。正に世は無宗教時代のようなのである。

明治百年を終え、この一世紀の日本仏教界を顧みて痛感することは、一面伝統ある仏教団の或意味での根強い生命力、しかし一方大衆とともに仏教が脈々として意気吹き上りしたといふことがなかつたといふことである。一寸矛盾の言ひ方ではあるが、伝統教団は何等かの形で国民との間に消極的な関係を持ち続けてはいるが、国民の力強い精神的なバックボーンとなり、社会の指導原理としての存在となり得ていなかったといふことである。徳川幕府時代以来終戦まで仏教は保護の美名の下に国家の支配下に置かれて来たことが仏教の墮落した一因ではある。しかし終戦後世界にも比類なき信教の自由が確立され、思ふ存分仏教の本質を発揮し得る環境を得たにもかかわらず旧態依然はどうしたにか。保護の外に置かれていた仏教系団体が寧ろ一部民衆の支持を得て活躍していることは、まことに皮肉である。だからと言ってこれらの新しい仏教運動が旧仏教団体の脱皮し、近代化された形であるとは言えない。仏教界の近代化とは、新旧を問わず現代の社会的条件を正確に分析し、未来学に参加する真に強力な価値ある仏教への発展でなければならぬ。我思惟す、故に我在り」といふ唯我思想は人間各自の可能性を促進し、輝しい近世を樹ち立てた。しかし飽くなき自己主張は、遂に人類を破滅へと導かざるを得ない。生産手段の私有化によって労働は疎外され、企業と分業が進むにつれ共同体組織は解体されて人間と人間をきりはなし、マス・コミ、マス・プロは人間を画一化、無思想化して人間と思想を媒介することなしに簡単に直接行動をとらしめている。更にはヒューマンであるべきテクノロジーを他を克服するためのインヒューマンなものとならしめ、遂に人類の破滅に導

ている。政治権力も私有化し、他に優位となるために、暴力テロが平然と行われる。これらにはみな唯我思想を中心とする近代文明が破滅した結果である。このような世界状況のなかで、漸く人間疎外の諸条件を克服して全人類の幸福の探求が始まって来ている。人類の運命は共同体であるという認識に発する思想がこれである。第三ヒューマニズムも、世界連邦思想、或は地域協力主義もみなその一構想であろう。しかし、これらの思想や構想も未完成であつて満足すべきものではない。従来、人間を考へる場合、地球上という時間と空間のなかで捉えて来たのだが、もう既にわれわれは宇宙のなかの人間という考えに立たねばならない時代である。死という問題についても、生物学的には可成従来の概念とは變つて来たし、分子生物学があらゆる分野の学問と共同して生命の起源、生命現象を解明し、試験管の中では生命の合成も可能となつて来た。このような時代にあつて宗教学も変貌せざるを得ない。アメリカに於て提唱された神なきキリスト教神学も、もはや宇宙創造神が通用しなくなつた結果ではないだろうか。そこで吾々仏教界も、仏教を徹底的な形で存続させるのではなく、今一度「仏教とは何か」という厳しい自己批判を行うことから仏教の現代的意義と未来学への役割を明かにすべきであると思う。仏教のことなら判っていると思ふしながら、実はまことに非仏教的な事柄が多い。何が仏教の根幹であり、何が第二義的附加的要素であるかを識別することによって、その本質を現代社会に即応して教学的に解明し、力強い実践を展開することによって仏教の地位を決定してゆかね (九頁最後) ※

恭賀

東 東 本 願 寺

住 職 大 谷 光 紹

輪 番 金 倉 儀 一

曹 洞 宗 宗 務 庁

管 長 佐 藤 泰 舜

宗 務 総 長 山 田 義 道

参 議 福 山 忍 哉

参 議 五 十 嵐 顕 道

教 学 部 長 宮 前 鳳 洲

総 務 部 長 芳 賀 達 宗

社 会 部 長 渡 辺 秀 雄

財 政 部 長 穴 戸 正 勝

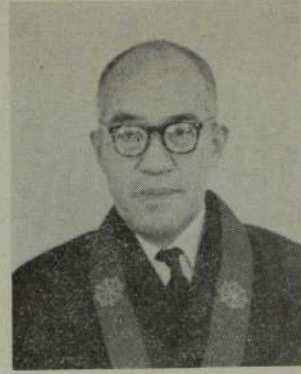
教 化 部 長 町 田 宗 夫

秘 書 室 長 松 下 淳 峰

企 画 室 長 岡 田 巳 成

国際専門委員長

中山理々



明治は遠くなりにけり

昭和四十四年の春が明ける。明治は遠くなりにけりである。

明治も御一新で画期的であったが、昭和は有史以来の敗戦とその大復興を含み国民の大転回では大きく明治を凌いでいる。

然し私はいま明治時代に宗派を離れて行なわれた新仏教徒同志会の革新運動を考えて見たい。それは大正初年まで続いたが境野黄洋、杉村縦横、結城素明、伊藤左千夫等の諸氏即ち学者、評論家、芸術家、歌人のグループであって後には鈴木大拙氏も加わり僧門では渡辺海旭師がいられた。

この新仏教徒同志会は、仏教の健全なる信仰を宣言し、知的で心情的で現世的で、楽天的活動的倫理的という六条件を持つ新仏教を主張しようというものであった。

従って因襲的な各宗及び一般寺院を批判し、僧職無用論まで飛び出している。

更に政府の軍国主義的愛国心を批判し、日露戦争の時には不殺生戒を掲げて「戦争を謳歌する宗教はあらざるべし、戦勝の祈禱は矛盾なり」と抵抗した。大正初期の第一次世界大戦に際しては、ドイツの軍国主義と共に日本の帝国主義も反省すべし、と論じた。

明治の末年幸徳秋水の大逆事件のとき万世一系は陳腐だと叫び床次内務次官の斡旋による原首相の神仏基三教会同に対しては「宗教利用問題大講演会」を開いて政治の宗教干渉を批判した。

公害問題にも革新意見を出し、足尾銅山の鉞毒事件については、地元民のために世論を喚起し被害民救済義損金を大募集した。また葬弊の改善とか、禁酒運動、動物虐待防止にも乗り出し風俗あらため会を起している。社会事業としては実費診療所を開き、国際的にはインド飢饉救済募金を展開した。

新仏教同志会は必然的にユニテリアンと握手し、ユニテリアンの六合雜誌は、二者は我邦の宗教界を刷新するに至らんと書いた。

新仏教同志会には行き過ぎもあったが、眼中宗派も政府も政党もなく純粋に護法の熱意で邁進したのである。私はその勇敢さに敬意を覚える。

終戦二十有余年、いま日本の仏教界は国の驚異的な経済復興の波に乗って花やかである。殊に公私の国際交流の盛んなことは正しく明治仏教界が夢想だにもしない所である。

然し仏教は見えざる不滅の心靈の確立即ち得涅槃を使命としている。隔年の賑やかな世界仏教徒会議や、毎年の全日本仏教徒会議に於て、全仏即ち各宗はその使命に鑑みて如何に寄与出来たか。

仏徒が不滅の信念に燃えるとき、為他の志気は衝天し自己宗派経営の関心を越えて、一般社会の有情利益と問題打開に向うてあろう。

各宗は、マスコミの脱線や、大学紛争や安保問題についても研究委を設けて衆生の病いを自己の病いとすべきであり、ベトナム戦争についても、仏教国ベトナムが日本大乘仏教の先輩である立場からしても、この不幸な二十年戦争の終熄について具体的な方策を考えるべきではないだろうか。

明治の聖者清沢満之師は、仏教の近代化は外形的な動きでなく仏道修行という方法以外にないと確信していた。昭和の現代に於てもこれは妥当する。

日本仏教界の喫緊事は宗派の垣根を越えて、不滅の信念を振立たせることである。かくて、宗派の称は魔波旬の称なりといわれた道元禪師に従って、日本仏教は宗派を越えた有情利益の大道に向うであろう。

世界を驚かしておる日本の経済復興の勢いとは対照的に、日本は仏教だけが自派伝統の過去の組織を維持するのみの姿勢であって、名は大乘であつても事実には小乗と言われねばならぬ。これはアジアの仏教諸国に対しても恥かしいし、明治仏教に対しても相済まなくはないかと思ふのである。

※ばならないと思う。仏教は刻々と発見される近似方則を決して否定はしないし、生命の起源が明かにされればされるほど仏教の真価を発揮することができると思う。全人類の福祉なくして個人の幸福と救済はあり得ないとする最近の思潮は、仏教を知ることによってはじめて完成されると確信する。

真宗大谷派
宗務所

管長 大谷光暢

宗務総長 訓 嗣信雄

参務 嶺 藤 亮

参務 佐々木 近衛

参務 手島 圭二郎

参務 武宮 聰雄

総務部長 渡辺 俊英

和宗総本山四天王寺

管長 出口 常順

執事長 吉田 秀映

新年

るか”を問題にしなければならぬとい
う二点である。

江戸時代から明治への変わり目のとき
はどうであったか。江戸時代の僧たち
は、ひと握りの大名と全人口の五パーセ
ントにも満たない武士階級のしもべだっ
た。封建体制のワク内で、ある程度の地
位と金をもたされ、完全に権力に迎合す
るよう育てられた。寺領を少しばかり
与えられ、人別帳や関所の手形書きで、
庶民より少しだけ上にランクづけされた
のがその例だ。幕府政治の「期待される
人間像」だったのである。もちろん、民
衆に「いかに生きるか」など本当のこ
ろは説教もしないで、二百六十年の年月
を鎖国とともに眠った。

一夜「封建時代」という夜が明け
ると、仏教家たちは大あわてにあわてた。
たよりの大名・武士はいなくなっている
し、民衆はほっぽを向くというありさま
だったからである。奈良興福寺の五重塔
がたった五円で売りに出されたのも、こ
のころのエピソードだ。そのうえ明治政
府からは、「排仏毀釈」の追い討ちをか
けられたのだから、僧侶は開祖の精神等
は忘れさり、安易にお経をあげるだけ
で、民衆をひきつけようとした。つまり
このときから「人生コンサルタント」の
職を捨て「お経の配達屋」が誕生したの
である。

ところで当時の民衆は、宗教を必要と
しなかったのか。さにあらず。やはり鎌
倉仏教のとき同様「いかに生きるか」を
苦悩しいかにすれば幸福に生きられるか
を宗教に求めようとした。明治期に金光
教、黒住教など教派神道十三派が生ま
れ、民衆から熱心に迎えられているのが
何よりの証拠である。

明治百年を見るとき、戦後はどうか。
二十三年間のうちに、いわゆる新興宗教
は一週間に二、三の割合で誕生している。
やはり社会の転換期には精神のささえ、
生活のささえを求めて民衆はいろいろの
宗教に手を出している。仏教ひとりが高
迷しているのは大きな問題である。戦後
から今に続くブームが二つある。その一
つは京都、奈良の寺院見物である。毎年
数百万人が訪れ国宝、重文の仏像を見て
いる。これをとって仏教は死なずといえ
るか。残念だがノーである。民衆が仏教
を求めようとしているのでなく、仏像を
見に来ただけなのだからだ。

もう一つのブームは仏教入門書がロン
グセラーを続けていること。たしかに多
くの仏教書が売れ、仏教思想、仏教哲学
はすばらしいとほめそやされている。だ
がこれは本当の信仰か。答えはノーであ
るか。仏教とはあくまで「いかに生きる
か」という人間のナマの生活を考えるも
のなのであり、決して文化、学問、教養
を高めるだけのものではないからであ
る。

新興宗教が伝統も、はっきりした哲学
を持たないまま、隆盛をきわめていくの
は、この点に原因がある。つまり生活の
中で、苦しみ、悲しみ、災難に会ったと
き、きようを生きる勇気を与えてくれる
ものが宗教でなくてはならないし、人々
も求めているものなのである。

ひつきよう宗教とは「現世利益」を与
えるものだ。いかにきようを幸福に生き
るか。こうした現世利益をとったら宗教
はゼロだ。しかるに仏教だけは死後の世
界を説き、墓守りすることに終始して
いる。「眠っている」といわれても、いた
しかたあるまい。飾り氣を捨ていかに生

きるかを民衆とともに考える姿勢をもつ
こと、開祖たちがやってきた「人生コン
サルタント」をもう一度真剣に考え直す
ことを考えてみたい。戦後という日本史
上でかつて見ない大転換期の現在、民衆
は生きる指針を求めてやまないからであ
る。(山陽新聞より転載)



謹賀新年

大本山 総持寺

横浜市鶴見区鶴見

貫首 岩本 務 俊

副貫首 金剛 秀 一

監院 室峰 梅 逸

浄土宗々務庁
総本山知恩院

浄土門主 岸 信宏

宗務総長 小林 大藏

執事長 鵜飼 隆 玄

宗務庁役職員一同

知恩院役職員一同

天台宗務庁

天台座主 即真 周 湛

大津市坂本々町
電話 〇七七五四(二)一一八



仏教の根本思想

(上)

岡山市の労働会館で開催された
第十三回全仏講習会においての友
松圓諦講師の講演内容である。

神田寺主管

友松圓諦

「全仏」本月号と二月号に二回
にわけ掲載いたします。

題しまして「仏教の根本思想」といた
しましたのですが、この仏教の根本思想
ということばはどなたがごらんになっ
てもすぐわかるでしょう。釈尊の根本、根
本というのは根です、大根（おおね）で
す。インドでは根のことをムーラと申す
のですが、土台なんです。釈尊のお考え
の土台は何であるか。こんなことはわか
りきったようでございますけれども、こ
れが大きな問題なんです。釈尊の根本思
想を申しましたが、今日、仏教の根本と
いうものを忘れているのじゃないかと思
う。なぜ仏教が予期したとおりに発展し
ないか。私は、申すと口はばったいので
すが、長年にわたって、仏教のほん
とうの思想がこの世に顕彰せられること
を祈ってきたのでありますけれども、な
かなか事志のようにはまいません。それ
はよく考えてみますと、八万何千ヶ寺
かあります各宗各派のご寺院が、その立
場、宗旨が違っているために根本という
ものに触れないのです。触れておりまし
ても弱いのですね。何か根本というよ
そごとのように、自分の宗旨以外のこと
のように考えるくせがあると思う。私

は、仏教の根本をつかまなければいけな
いと思う。

まして、今日は釈尊の根本思想とおき
ましたから、これにも一言申し加えてお
きますが、釈尊は何も根本のお話しなん
かなさらない。対機説法ですから、その
ときそのときに相手が必要ならば女の話
をする。相手が青年なら青年の話を、相手
がインテリならインテリの話をされたん
だから、釈尊の四十五方年間のご思想と
いうものは一貫して貫いたものはありや
しない。そのときそのときの、まあ突き
あたりばったりと申しますといけません
が、随機随応であるので、それに共通の
最大公約数なんてものを求めることは困
難であるということをご昔から言ってお
るのです。

しかし、それでは話になりませんの
で、やっぱりどんなにお釈迦さまがおえ
らい方であっても、四十五年間毎年毎年
変わるわけなのですから、四十五年を
一貫して一本の筋が、バックボーンが通
っている。このバックボーンを少し話し
たいのです。なぜ現代の仏教が望ましい
発展をしないかという、そのバックボ

ーン、土台へ触れてないと思うのです。
触れないまでも触れ方が少ないと思うの
です。しからば、何が釈尊の根本思想で
あるか。私はこれを一応、「根本思想」
と「根本態度」というふうに分けていき
たいのです。

根本態度——中道——

まず、根本思想の前に根本の態度があ
ると思う。これは言うまでもなく寛大の
精神、寛容の精神です。極端なことを言
わないという思想がある。この思想が、
実は釈尊の根本的態度なんです。それが
同時に仏教の根本的態度であり、特色な
んです。

いまご承知のとおり、世界をあげて大
学生の問題がやかましくございますけ
れども、あれは何か八かんです。オー
ル・オア・ナッシングなんです。激しい
排撃運動というもののほうが大向こうを
うならすのです。たとえば、政党にいた
りまして、いま自民党は保守、社会党
は革新と言われていますが、そのほかに
共産党も今度は得票が多いのです。共産
党か自民党かとはっきりしているの

寿 春

大本山成田山

新 勝 寺

貫主 松田照応

真言宗智山派宗務庁

管長 那須政隆

宗務総長 上野頼栄

庶務部長 田中隆恵

教学部長 別所弘因

財務部長 小沢照禧

参拝部長 二村俊夫

智山教化
研究所長 長沢実導

す。ところが、社会党も、いわんやまんの民社党なんかよけいはっきりしない。はっきりしないことがいい。はっきりしないが、仏教という教えははっきりしないのです。一か八かやらないのです。おまえが敵だ、おれが味方だ。敵と味方というのを区別しないのです。そこに仏教というものの尊さがありますけれども、仏教というものはどうも大衆受けしないのです。

変な話から始まりましたが、その見方を私は、なぜそれではお釈迦さまのお考えが穏健な、相手をバチバチやっつけなという寛大な精神をもっておられたかと申しますと、もとよりいろいろあります。釈尊ご自身のご性格、そういうお人柄だといってしまうばおしいです。

私の一貫した見方は人類文化学なんです。人類文化学なんて申しますと大きな学問のように聞こえますけれども、大昔で言えば寺田寅彦先生の書いたもの。後年は和辻哲郎先生。最近では石田英一郎先生がやっております人類文化学。私は人類文化学の立場から今日まで仏教を勉強してまいりました。特に、そのうちの仏教の法律、政治、経済というものの立場から仏教をみてきたのですが、そういう立場からもう一べん釈尊の根本思想、根本的態度というものをながめてみた。

苦行をすてる

それじゃなぜお釈迦さまがその穏健な寛容な精神をおもちになったかと申すと、私は確かに釈尊のご体験もありまます。ご承知のとおり、二十九で出家になりましたが六年間ご修業になったのであります。そのときに最初はインド風

で、いわゆるインド在来のやり方で、自分の身を苦しめればよい。体力を衰えさせれば悪いことをしない。りっぱな悟りが得られると、こう考えた。この考えに従いまして、苦行をせられました。その苦行をしたために、毎日毎日召し上げるものはほんの少量の穀物ですから、六年間に衰えてしまつて、くたくたになつてしまつて、あるパリーの経典などを見ますと、あばら骨が出て静脈がはつきり見えたということがお経に書いてあります。それが例の出世の釈迦ですね。体力的に衰えてしまつたときに釈尊ははつと気がつかれたのです。一体、仏道修行というものは、このおのれの肉体を苦しめ苦しめていくことが悟りであろうか。これはつまらんことじゃないかということにお気づきになりました。そのときの苦行というものが舵のない船みたいなものだった。そういうことをおっしゃつておられました。たまたまそのときに疲れて尼蓮禪阿にお入りになりました。水浴をしてやつとこさ枝によじ登つて岸にたどりついたときに、ウルベラという村の村長(むらおさ)の娘、スジアータがしぼりたての牛乳を持ってまいりました。もういま人事不省になつていて瀕死のお釈迦さまにミルクを差し上げるのです。そうすると、お釈迦さまはこれを受けようか受けまいか。五人の仲間がいて飲むか飲まないか見ているのです。飲んだらお釈迦さまは墮落するぞー。そういうときにお釈迦さまはうやうやしくそのしぼりたてのミルクを召し上がった。

これが仏伝のしるすところなんです。ここに釈尊の一大転期があつたのです。ただいたずらに肉身を痛めることが仏道修行であるか。いただくべきものはいただいて

で、命あつての物種だから、命というものを大事にしなればいけないということに極めて合理的な常識的な立場に帰えられたのが、これが中道です。そのことはもう經典は一貫しております。ですから、仏教の態度、釈尊の根本思想の態度というものを申しますれば、中道です。中道というのは決して妥協ではないのです。中国の中庸とは違つたのです。申しますのは、後ほど申しますけれども、何ものも否定しないということなんです。一法といえども否定すべきものはないという考え。何もそう目に角を立てて苦行だけがほんとうのことだと思つちやいかん。牛乳飲むことがなぜ悪いか。そんなことに目くじら立てる必要はないじゃないか。この穏健な濃厚な寛容な精神態度というものが仏教の態度だと思つたのです。

釈迦に提婆

一番わかりやすい例を申しますと、皆さま方にはご承知の釈迦に提婆。耶穌のユダ。敵役です。どのお経にも提婆というものは悪いことばかり書いてあります。法華経が一番穏やかです。法華経はどうとう提婆を救うのでありますけれども。なぜそんなに目の敵にして提婆というものをやかましくいったかと申すと、提婆はお釈迦さまとおよそ反対の意見なんです。大筋では合つたかもしませんが、そのきびしい点、非常に提婆は釈尊を非難したのです。お釈迦さまはえらそうなることをやっていると違つたやないか。村の信者から招待されれば大勢お供を連れてお食事に呼ばれるじゃないか。およそ、修行者が招待を受けて女、

東京都文京区大塚五丁目四〇番八号
真言宗豊山派宗務所

管 長 岡 慶 信

宗務総長 小野塚 潤 澄

総務部長 築 山 定 誉

財務部長 野 口 宥 興

教務部長 永 見 聖 宏

東叡山寛永寺

賀 春

昭和44年1月1日

子供の接待を受けるなんてけしからん。修行者というものは接待を受けちゃいけない。村の中へ入っちゃいかん。家の中へ入ることは墮落である。できるならば地の下へ坐われ。決して魚を食っちゃいかん。肉を食っちゃいかん。牛乳を飲んじゃいかん。これが提婆の主張なんです。この提婆の主張というものはほんとに大受けに受けましてね。そうでしょう。大体、インドの思想というものは極端なきびしい寒さ。そういう国では極端な思想になるのです。一か八か、オール・オア・ナッシング、敵か味方かはっきりしたいのです。

ところが、釈尊はそれに対して提婆を破門いたしました。それで、破門された提婆はその後どうなったかと申しますと、インドへ行つた法顯と申します。五世紀です。玄奘は七世紀です。六百年にインドへ行つたのです。そして、至るところに提婆教団があったと書いてあります。もうお釈迦さまが死んで、千年たつてもまだ提婆を信ずるお寺や坊さんがおつたわけですね。そのお寺へ行ってみると、提婆の教えを中心として決してお釈迦さまを拜まなかつたと書いてあります。酪乳を口にせずと書いてあります。また、竜樹の作といわれ、羅什の訳であります大智度論にはっきり、この提婆の教団というものには声聞法大乘法をつけて、難蔵、三蔵のほかは難蔵をもち、声聞法大乘法をもつていた。ですから、提婆の教団でもやっぱり法華経とかそれに類した大乘経典を編さんしてお

たらしいです。

そういうことを見ますと、極端なことを主張するほうが長続きするのです。そこにどうしてもお釈迦さまの教えというものが郷土母国であったところのインドを追放されてしまつて、釈尊滅千何百年でどうとうインドに仏教は根切れしちやつた。いまありますのは最近の仏教です。ネールが総理大臣のときに司法大臣をいたしましたアンベデカという人が出てきまして、ネオ・ブッディスト、新仏教徒というものがいまボンベイを中心に五十万から百万おられますが、これは最近の仏教徒です。もうネールまではほとんど仏教徒は根絶えしちやつたのです。なぜ仏教が根絶えしたかと申しますと、根本的態度が、インドの体質と釈尊の体質が違ふのです。なぜ違ふかということをお話し上げたいのです。

寛容の思想を生む背景

私はこれを人類文化と申しますか、仏教の厚生経済研究の立場から、私は釈尊のお生まれになった母国のお国柄というものが穏やかな思想をつくるような大きな原因、条件ではないかと思うのです。現に、先ほど申しました玄奘が七世紀にお釈迦さまのところへ訪問しておられ、こんなことを書いてあります。これは西域記の第六巻に書いてあります。お釈迦さまの土地というのは良沃、非常に肥えており、稼穡時に播き、それで農業が非常に盛んであって、地上憂いなし、地上というのは温度、気候です。風俗和暢というわけですね。ですから、お釈迦さまのお国柄というものが非常に穏やかで、四季、春夏秋冬のけじめもちゃんとあって、冬になれば雪も降り、霜もおり

る。春になればそれこそ鳥歌い、花開く、そういうところなんです。ヒマラヤのすぐ南ですからね。非常に美しい。はっきり数字を申しますと、北緯二十七度九分、東経八十三度二十分というのですから、ちょうど熱帯じゃないのです。亜熱帯と申しますと、まことに日本と同じような気候なんです。しかも、ヒマラヤの南の高台ですから、涼しくて気候は非常にいいのです。ですから、何かお釈迦さまを熱帯地の黒んぼの親戚みたいに思っている人は大間違ひ。インドも広いのですから、お釈迦さまのところはインドといひましても非常に穏やかな春夏秋冬のけじめのあるいいところだった。しかも、水はこんこんと流れているのです。ちょうど静岡岡阜の三島みたいなところで。万古融けないところの雪がだんだんだんだんしほり出てきますから、融けて流れてノエ。もうとつても水が流れてくるのです。ですから、至るところで水田が盛んなのです。

皆さま方はいかに水田で米がとれたかはご承知でしょう。お釈迦さまのおとうさんの名前は何ですか、スッドーナです。オランダというのは米、ライスです。お釈迦さまのおとうさまは浄飯王、おじさんは黒飯王、白飯王、甘露飯王、みんな飯(ほん)という字がついてい。そのくらいですから、日本で申しますと、米田米作、米三というようのもので、米の字がたくさんつく。それをもつてしても米のないところに米三は出ません。米太郎も出ないです。やっぱり、浄飯王、黒飯王、甘露飯王等々というのはいかに米が盛んにとれたかという、そういう農業地帯なんです。そこからどうして米盛やかな人が出てくるのです。耶蘇

が生まれたところ、あるいはマホメッドが生まれたところはお釈迦さまとは違ふのです。極端なことが好きです。まして、北方から来た西洋文明というのは、みんな穴ぐらにおりますから、穴ぐら文明です。どういうところでお生まれになったか、どういうところにお育ちになったかということはお違ひです。私は、これがお釈迦さまの態度に寛容な、排他的でない穏やかな思想が発展したと思うのです。この思想がだんだん発展していったものが諸法実相の考えなんです。

イオ食する者：せぬ者：

ひとつ例をとらせていただきますが、日本の仏教で申しますと、私は浄土宗に若い時代縁があります。終戦後二宗一派に属しませんが自由な立場になりましたけれども、大体、私は浄土宗に育ちまして、この岡山県へは誕生寺まで四十ごろに来たことがあるのです。誕生寺は法然上人のご誕生地ですから来たことがあるのです。その法然上人の話をいたしますと、法然上人という人は非常に念仏をむきになった人です。けれども、仏教の道の中という思想、これは特に、宮本正尊博士が非常に力説した「中」という思想をもつていられるのです。鎌倉時代には魚と「イオ」と申しますが、岡山では京では「ウオ」と申しますが、岡山ではどうなんでしょうか。「ウオ」でしょうか、「イオ」でしょうか。「イオ」と呼ぶ者あり。それがほんとうの名前なんです。鎌倉時代から「イオ」と言つたのです。「イオ」を食べる、イオ食(じき)というのです。極楽往生をするにはイオ食、魚を食つたほうがよろしいか、よろしくな

いかという質問をしているのです。イオ食する者往生すとせば鶴ぞせんずる。イオ食せぬ者ころ往生すとせば鶴ぞせんずる。猿というのは魚がきらいだそうです。私、存じませんが、法然上人にしてはそういう動物学まで勉強された方とみえて「イオ食せぬ者こそ往生すとせば鶴ぞせんずる。往生はイオ食するにもよらず、せぬにもよらず。念仏申す者ぞ、往生はせんずれ」ということを、これは鎌倉のことばですが、そう言っています。それなんです、仏教の中という思想は。これは各宗各派の宗祖がみんなこの思想を受けています。

最近、創価学会がしきりに、自分のところの創価学会、日蓮正宗こそ本物で、その他はみんな間違いだという考えは、これはお釈迦さまも始終、終生、一生涯の間、注意された。そういう考えはいかん。自分だけが本物で、あとみんな間違っていると考えちゃいかん。お釈迦さまの考え方は「ともにこれ凡夫なり」これは聖徳太子のことばにあります。ともにこれ凡夫なんです。自分がいいと思ってもはたは悪いという人がある。「われの是は彼の非にして、彼の是はまたわれの非である。是非の理、なんぞよくすらむべき」と言ったのです。ともにこれ凡夫なり。相対主義なんです。絶対というものをお釈迦というのには認めないのです。それがお釈迦さまの根本の態度だと思おうのです。これが皆さま方に徹底していけば、仏教というものはこういうものだ。一宗一派にかかわらず、およそ仏教という名のつくものはみんな寛容の精神、なんじの敵を愛せよというか、その考え方よりもっと乗り越えて恩信平等なり、悟りを開いたものにも敵というものがない

のです。無我の思想には敵というものがない。われが敵、人が味方というのはない。味方が、敵だなんて言っているのは凡夫なんです。

あなた方みんな他人だと思っただけで、隣は何をする人ぞで他人の上にも赤なかつて赤の他人だ。一体この世の中に赤の他人というのは何でしょう。親鸞聖人が、自分は親孝行のために念仏を申したことは一べんもない。そのわけは、すべてこの世の中というのは生々世々、みんな代々父母兄弟である。いま皆さま方、お集まりの方々はみんな性は違いでしょう。私は友松、出口先生、山田先生と違いますけれども、友松とおうと出口といおうと山田といおうと、結局は二十代も三十代も戻ればみんな兄弟、姉妹、同胞なんです。これが仏教の立場なんです。こういう立場からみれば敵も味方というふうなものもない。そこに無縁の大慈、無縁の慈悲という精神が仏教に出てくると思う。

この世のならい

話は行き過ぎましたけれども、いま申し上げたいことをもう一べん整理しておきますと、それを諸法実相と申すのです。「中」ということは一切はある、一切はないと言ふことはいけないうのです。一切は同じだ、一切は違っていると言ふちゃいかん。これは皆さま方の知っていらっしゃる竜樹の八不ですね。生滅断常一異去来。一というのは同じだ。同じだと言ふちゃいかん。この中にみんな同じだと言ふのも間違ひであるし、みんな異っているという事も間違ひだ。それから、すべては生じたもの、すべては滅するものと言ふちゃいかん。断もい

かん、常もいかん。すべていつまでも続いているものだというのを常という。なくなっちゃうものだという考え方、その不断不常・不生不滅・不一不異・不去不来というところにほんとうの「中」があるというところを竜樹は大智度論の中に力説している。これが私は仏教だと思っただけで、わがかりやすく申しますと、否定すべきものは一つもない。この世にあるものはみんな何かの意味がある。否定してはいかん。否定すべきものは一つもないということなんです。

また法然上人の話に戻ります。法然上人にある人が「歌詠むは罪にて候か」と言っています。法然上人時代は、万葉以来歌を詠むというのはみんな恋歌（こいうた）なんです。相聞歌、ラブソングなんです。いまの恋愛の歌なんです。ですから、歌をつくっては罪でございまして、うかと言っているが、法然上人は「罪ともなり功德ともなる」と言っているのです。これが仏教の「中」なんです。いい歌をつくればそれは功德ともなるし、変な歌をつくれば罪にもなる。そうおっしゃっている法然上人にもなかなか恋愛の歌がありますよ。ちょっと忘れちゃったけれども、かりそめの色の何とかには恋に身をまかせしめはする……なんて、なかなか法然上人も恋愛のそういうった気持ちがあわかっていると思うのです。そういう歌があります。

また、法然上人も「お酒を飲むのはいいでしようか」それに対して「まことは飲むべきにあらねど——ほんとうは飲んじやいけないが——この世のならい」と言っています。これはちょっとずるい言い方で、この世のならいなんてうまいことを言っただけで、おれの思ふことをずばりだ

なんて思うことがあるわけです。私、一度高野山へまわりましておもしろい話を聞いたことがあるのですが、弘法大師のご遺教にも「飲酒（おんじゆ）一ぱいこれを許す」ということばがあるそうです。酒を飲むが一ぱいはいいい。ところが、何に一ぱいだか書いてない。腹いっぱいと思っただけです。そういうことを高野山で聞いて、おもしろいことを言うなと思いました。「飲酒一ぱいこれを許す」その一ぱいを自分でかってに樽一ぱい、腹いっぱいと思っただけです。もうおしまいですね。法然上人が「まことは飲むべきにあらねど、この世のならい」とおっしゃったのは三三九度をやるのに「おれは仏教徒だ、酒は飲まん」と言うのはプロテスタンス、ひねくれです。ピュリタンです。極端です。結婚の礼儀ですもの、ほんの一ぱいぐらいいいじやないか、こういったゆるやかなお気持ちというものは積尊の態度で、それが流れて仏教の根本思想——ですから、仏教はキリスト教のように、天なる神、一人を信ずるといふことを言わない。みんなきょう申し上げましたように、仏法僧の三宝に帰依する。ところが、キリスト教ではエホバの神を信ずる以外はことごとく邪道なんです。これを仏教では一向と申します。エーカパーディンと申す。エーカというのはいっ、パーディンは主張。一向という考え方が仏教はきらいののです。

不 一 向

今日は浄土真宗の方がみえますけれども、私も浄土真宗の家に生まれましたのですが、東本願寺で一向宗と申します。一向宗という名は決して一向宗がつけた名前じゃないのです。これは悪口なんで

す。非難のことばです。まるで阿弥陀さまを一心一向に……。善導大師のことばにありますが、ひたむきに馬車馬みたいに阿弥陀さま一点張りだという考え方は一向宗です。仏教じゃない。仏教は不一向。一向でない、アン・エーカーバードインと申します。この一向でないということとは、そこにむずかしいところがある。そこに仏教の弱点もあれば長所もある。ということばは、仏教というものはどうも煮え切らない。何かそこにちょっと足らんものがあるのです。一向というふうにはっきり夢中になって神か悪魔かというふうには、昔からの従来の神道をちゃんとして認めて神仏習合なんていうが、これは仏教の特徴なんです。もしキリスト教がああ時分に日本へ入ってきたら神椎の道は根絶やしでしょうね。何も残りません。皆さま方もそうでしょう。ヨーロッパの文明をこらんになって、みんなキリスト教一色に塗りつぶされちゃっている。私もドイツに長くおりましたが、ドイツではずいぶんキリスト教が入る前の宗教がまだ残っております。ちょっとくしゃみをしますと妙な祈りをいいます。何か年末にはノイヤ、ノイヤと悪魔払いをします。キリスト教が入ったからといって昔のゴール人の宗教は決して根絶やしにはなっておりませんが、しかし一応表向きは従来の宗教はみんな否定されてしまった。仏教はどこへいきましてその土地の教えとこの世のならいでちゃんと妥協しながら、その妥協をする点が仏教のいいところであって、実は煮え切らないところなんです。これがいまの青年のヘルメットの角棒か、角材を引っ張りまわす。あれにはピンとこない。何だか人

気がない。ちょうど自民党が何か人気がないような、共産党のほうがはつきりしているような、そこに私は仏教というものの態度に亜熱帯的な温帯的な風土というものが非常に影響しているということも、私は人類文化学あるいは仏教の経済思想から申したい。

つまり、農村の生産嚆矢なんです。農村生活というものは決して激しいことを認めないのです。激しかったら穀物はとれないのです。「春は雨、夏夕立に秋日照り、世の中よかれ、われこじきせん」ということを良寛が歌っています。こういう春夏秋冬の穏やかなバランス。自然はバランスがとれているのですけれども、バランスというものを認めていくとすると、それが仏教の生まれてきたところの温床だと思ふ。そういうような亜熱帯の農村生活を背景として生まれたものが、まず第一に申し上げたい「中」という思想です。

根本思想 — 諸行無常 —

その次に申し上げたいことは、今度が根本思想ですが、無常です。無常という考えは、一切は変わるといふことです。今日お集まりの皆さまも刻々と変わっていらっしやいます。しらがなども、やかましく言ったならば何ミリの何万分の一かはふえているわけです。私みたいにいふえ切っちゃったらとまったかもしれません。ほとんど変わっている。その変わっているというこの思想はどこからきたか。私は寮間でございますから、まだ学問が弱いですが、インド在来を思想をすみからすみまで勉強したとは申し上げられません。一通りは大づかみに知っ

ているつもりです。無常という思想の系列、この毛並みはないのです。どうも、ある人はギリシャの文明じゃないか。ギリシャにはヘラクリトスという学者がいて万物流転を説いたから、ギリシャから入ってきたんじゃないかと言う人がいますが、ないともいえます。もうすでお釈迦さま時分には、ギリシャとの交渉が風聞と申しますか、ニュースとか、インフォメーションというのがだんだん入ってきていますから、多少あったでしょうけれども、少し新しいお経になるとみんなギリシャのことを書いています。ギリシャでは四つなのに二つだというわけ。インドでは四つなの中にギリシャはまねをせよということを書いてあります。ですから、ギリシャの文明というのは全然入っていないとは言いません。お経の中では輪郭と書いたのがヨーナ。あれはヨーニアン・ドルジャンのヨーニアン・ギリシャです。それとインダス川のほうへ植民いたしました。インド・ギリシャ領がそのヨーナなんです。ヨーナ・ギリシャの文明というものが影響していると思ふ。特に、今日の仏像というのはほとんどガンダラ仏像です。ガンダラというのは大体においてギリシャの様式と技術を入れたものだと言われています。しかしながら、私の考えではどうも時代が食い違っています。お釈迦さまがギリシャの影響を受けて諸行無常ということをお受け取りになったとはどうも思えません。これはまた私の自分独自の考えですが、私はやっぱり釈尊の郷土、故郷だと思ひます。先刻も言ったでしょう。ヒマラヤが北にそびえています。雪が融けてどんどん流れています。お釈迦さま

のお国というものはせいぜい広くて千葉県ぐらいです。人口が二、三十万あったでしょう。そんなになかったかもしら。小さい国です。そのお釈迦さまのお国は全部、小川、大川、中川がいっぱい流れているのです。川ばかりです。こういうような水が多いということ、非常に水が豊かだということ、これが私、影響したのじゃないかと思ふのです。

孔子の「論語」を読んでみますと、孔子が川のほとりにてこう言っています。「行くものやかくのごとし、昼夜を待たず」どうして行った水がもう帰らんのだらうか。きょうの水はあしたの水ではない。あしたの水はもうきょうの水でもない。どんどんどん変わって、こんなとして移り変わっていくことをまのあたりに、幼少年時代から来る日も、来る日も川の流れ、川のせせらぎを聞いたり見たりすれば、そこに自然というものが移り変わっていくんだなということを感じられると思ふのです。

よく釈尊の伝記を拝見いたしますと、四門出遊、四つの東西南北の門を出られまして、そして最初に老人に会いました。その次に死人に会った。最後に出家に会ったという伝えですけども、こういうような考え方というのは釈尊の体験からきたのです。人間は生まれたものは必ず死ぬんだ。若い者は必ず年をとるんだ。こういった、ものが移り行くという流動、流れ動いていくというこの思想は、釈尊がご自分で発明されたといわれておりますが、それに違いないのです。これはもうインドの在来にはないのです。ギリシャに急に縁を結ぶわけにはいかない。やっぱり釈尊が幼少時代からお国柄でこういう

ものができたんじゃないかと思うので
す。

無常の国日本

ですから、無常という思想はこれは非常
常に日本にズバリと入りましてね。日本
というのはほとんどこれは無常の国で
す。日本の文明というのは無常の文明で
す。インドから出ました仏教が、西域、
中国、朝鮮と通ってまいりましたが、こ
の三國仏法の中で一番無常という思想を
ピチッと受けとめた国はないですね。こ
れこそ大乘相應の地、日本なのでしょ
うね。また、日本という国が無常というこ
とを認めるにふさわしいような風土、人
情なんです。山川草木、ことごとくお釈
迦さまがお生まれになった釈迦民族に合
っているのです。同時にまた、釈迦とい
う字をご承知でしょうが、あれは勇気の

あるという字です。釈迦という字は可能
性の能という字です。非常に勇気のある
民族です。やっぱり日本も勇気のある民
族ですから、水の流れを見て暮らすなん
ていう歌がありますが、水の流れを見て
暮らすということが非常に人間にダイナミ
ックなエネルギー、非常にエネル
ギー、スタミナというものを持たせる。
七ころび八起きというふうな不屈の民族
精神というものをつくったのがこの無常
の思想だと思ふ。これはインドからきて
おりますけれども、一番日本がピチッと
受けとめております。

ましてや、皆さま方ご承知のとおり、
いろいろ歌というものが出まして、これは
弘法大師がおつくりになったという俗説
です。これはそういうことは全然ありま
せん。どうしてもこれは十一世紀以上は
はさかのぼれません。十一世紀から十二
世紀までにならなければ出ない。第一

平和のためのアピール

世界のすべての人びとが求めてやま
ぬ平和実現のために、いままでに、い
ろいろの努力がなされて来ました。し
かし、今日のように平和が極度におび
やかされていく時代には、ひとりりど
りが、正義と人類愛を高くかかげて、
勇気をもって平和実現のために、さら
にいつその力を傾けることが必要で
あります。

一九六七年十二月八日、ローマ教皇
パウロ六世は、全世界の善意ある人び
とに、新年の最初の日を平和の日とす
ることを呼びかけました。私たち日本
の宗教者も、これに心から賛意を表
し、打って一丸となり、元旦を平和の
日として平和のために努力する決意を

新たにしよう、ひろく呼びかけたい
と思ひます。

そして、この決意と努力が将来の歴
史への正しい発展と、真の平和へのか
け橋となるよう、毎年、くりかえされ
ることを熱望します。
すべての宗教者は、それぞれの立場と
特色を生かした方法で平和実現への実
践をすすめていくと共に、また、手を
つなぎ力をあわせて強力な運動を展開
する日の一日もすみやかに来ることを
切望してやみません。

昭和四十三年十二月二十日

財団法人 日本 宗教 連 盟
平和のための宗教者会議準備委員会

「色にはへどちりぬるを、わがよたれ
ぞ常ならむ」というのは和歌じゃなくて
今様ですから。あの今様という文字が成
立したのは平安の初期じゃないのです。
まあ、いろいろ説があります。四人ぐら
いいま候補者があがっておりますが、こ
れは何でもいいものはみんな弘法大師に
押しつけてしまふご大師信仰からきたも
のでありまして、歴史的には何も価値が
ないのです。

今様ですと、大体、平安の末期、鎌倉
のちよつと初めの頃にできたと思ひます
けれども、この歌がお習字のお手本にな
った。ひらがなのお手本になったという
ことがどれほど日本人に、三歳の童子か
ら八十の老翁に至るまで、明けても暮れ
ても「色にはへどちりぬるを、わがよ
たれぞ常ならむ」この無常という思想を
これでもか、これでもかたたきつけ
た。

宗教法人の税務(完)座談会

※ (前号より)

もっぱら学生を宿泊させる学生寮で、
その下宿料が一日二食付で月六千円以下
ならば、これは収益事業とみなないん
だ、要するに簡易旅館業になるから、こ
れは収益事業でない。あるいはまたこれ
も大事なことで、会員、組合員その
他これに準ずる特定の者であつて、その
宿泊料が一日二食付で一日三百円以下の
場合、この場合には簡易旅館業になるか
ら、これは収益事業からはすんだと、
ただし規定外の酒食を提供することを常
として、一日千円以上というものはこの
かぎりでない。収益事業にはいると、こ
ういう規定があるわけですね。こういう
ことです。もっぱら、学生であつ
て、さきほどのような、会員、組合員と
いうようなもので、金額が一月六千円以
下とか、あるいは一日三百円以下である
という場合には非課税である。ただ、問

題によく引出されますのが、六千円じゃ
なくて、ずっといいものを食べさせて、
一万円もらつていふんだと、しかしいろ
いろと減価償却するとか、そのほかを引
いてみましたら、五千八百円になつちゃ
つた、こういう場合にはどうなんだと。
これは収益事業なんです。収益事業なん
だけれども、その減価償却なり食費の原
材料なりは引いてよろしいんだ、これは
差引六千円以上にならないければ収益事業
からはすんだということじゃなくて、
これは収益事業であるけれども、要する
に原価計算をしてよろしいんだと。さき
ほど、賃借料、使用料は損金と認めない
というものは、全然意味が違ひまして、こ
れは原価計算であるから、これは認め
る、千円しかなければ千円だけでよろし
いんだ、ただし、これは、六千円以下に
なったから収益事業ではないんだという
意味ではありません。そういう問題が、

る。いろいろからんでくるんですけれども、原則としてそういうことになっておりませう。

東川 それは、純利益が上がらなければ……

西尾 一万円もらっても、一万円かかっておれば、これは収益事業であつても税金はかからないということ、収益事業ではないということではないわけですね。

東川 そういうのは、都内でも割合多くありますが、一日に二食で三百円以下というのは、大教団のうちでも極めて少数で、一泊二食付三百円以下というそんな時代はすれのような、安く宿泊させてくれるものはないでしょう。それで、七百元とつてるところも、減価償却をおとして、要するに、利益が上がらない。これはありますね。それは収益事業ではあるけれども、利益がないから税金がかからないんだということですね。

ユースホステル協会との契約による宿泊

磯波 それで、よくあるんですがね、日本ユースホステル協会というのがございますね、あそこ契約輸送をすることになってるんですが相当数あるんですね。こういう場合なんか、一応この範疇にはいるでしょうね。

西尾 そういうことになりませうね。
磯波 これは、ユースホステルという制度が、戦後ドイツからはいってきたもので、結局、協会もユースホステルを建てるといふのは非常に少ないんですよ。だもんだから、お寺さんと契約して、ずいぶんやっつるわけですね。千円を越すんじゃないでしょうか。

浅見 テラステルというやつですか(笑)。

磯波 ええ。私、体育局におつたことがあります。が、体育局で、非常な大事なこと、青少年の野外活動で、そのいちばん手取早いのはお寺さんに利用さしていたらどうかというのが多いわけですよ。もちろん、その、純教化的にやっておいでになる住職さんもおいでになるわけですね。これもひっかかるわけですね。これに該当しますね。

加藤 まだ個別の問題として、いろいろあるわけでございますけれども、たとえば、保育園だとか幼稚園経営ですね、こういった場合の税金の問題はどうなるかとか、あるいは不動産を取得した場合の、それに関連した税金とか、個別的には非常にまだ問題があるかと思ひますが、本日の座談会もそろそろ時間がまいましたように、こういったいろいろな個別の問題を取り上げて、実は私どもでは、このような宗教学者に対するいろいろの税金問題に答えるための「税金の問答集」というようなものを発行したいということ、準備をしておりますが、それも近く発行する予定でございます。これは、事業を経営している宗教法人ばかりでなく、全宗教法人が即座に役に立つような内容にしたいと考えております。できあがりしたらひとつごらんいただいで、ご批判をいただければ大変幸いです。お忙しいところをどうもありがとうございました。以上をもちまして本日の座談会を終らしていただきます。どうもありがとうございます。(完)



東京都台東区谷中五丁目八番二八号

新義真言宗事務所

電話 東京(03) 四〇五三

神奈川県仏教会

- 総裁 岩本 勝俊
- 会長 高橋 隆天
- 副会長 峯 堅雅
- “ 横山 競禅
- “ 貝山 宣泰
- “ 小沢 省元
- 常務理事 一同
- 事務局長 柳下 隆侃
- 川崎市大師町四一四八
- 大本山川崎大師平間寺中

孝道 教団
孝道山本仏殿

統理 岡野 正道
副統理 岡野 貴美子

国際仏教交流センター

理事長 岡埜 輝勝

横浜市神奈川区孝道山

真言宗大覚寺派宗務庁

管長 大僧正 草 繫全 宜
門跡

京都市右京区嵯峨
大本山大覚寺



静岡県仏教会

会長 松村 寿 顕
 事務局長 浅井 仏 宗
 会計 野上 達 雄
 静岡市資谷二丁目(蓮永寺)
 電話 静岡 四五―一五三六

兵庫県仏教会

会長 中野 文 門
 神戸市兵庫区松本通三丁目二
 法華寺 中
 電話 神戸 (〇七八)
 五二―一六六八番



岐阜県仏教会

会長 大石 好 文
 事務局 岐阜市千手堂北町二
 TEL(五二)五一―三一九三

石川県仏教会長
 大谷派金沢別院輪番

吉田 智 信

茨城県仏教会

会長 川田 聖 見
 事務局長 小原 泰 寿
 事務局次長 土越 正 道
 総務部長 大越 孝 仁
 組織 " 曾根田 俊 雄
 経理 " 奥田 俊 亮
 教化 " 奥田 俊 亮
 広報 " 猪瀬 宝 山

財団法人日本仏教顕仰会理事長
 真宗大谷派法善寺住職

中山 理 々

東京都北区赤羽台三丁目
 二四番二号
 神田事務所
 東京都千代田区内神田
 二丁目三番五号
 電話 (郵) 四九一―一番

浄土宗西山深草派

管 長 倉内 賢 示
 宗務部長 松田 法 全
 総務部長 板倉 勝 隆
 教学部長 板倉 修 峰

群馬県仏教連合会長
 財団法人群馬県仏教保護会理事長

松 浦 亮 一

事務所 前橋市紅雲町一丁目二四番六号
 自宅 群馬県甘泉郡甘泉町善慶寺甲四二二

京都府仏教会

会長 平野 龍 法

神田 眞理運動本部 寺
 神田寺 幼稚園

主 管 友 松 圓 諦
 副主管 友 松 諦 道
 園 長

世界仏教協会々々
 「女性仏教」社長

筒 井 弥 二 郎

東京都港区芝公園五の十
 「実業の世界」内
 電話 (掛) 二二五―一四

高岩 寺

来馬 道 断

京都市東山区右門前通東山線西入

株式会社 安藤法衣仏具店

代表取締役 安藤 宇 助

(電) 京都 七五―五六一 (法衣) 二四〇二
 (電) 京都 七五―五六一 (仏具) 二四〇二

株式会社 小堀仏具店
 本店 京都市烏丸通東本願寺前
 電話 37-2195 (代表)・37-1256
 東京店 台東区西浅草1丁目6番5号
 電話 844-3715・6656・841-8328

大谷ご本願、産内改装
 ご莊嚴設計施工の栄に
 浴しました。

真言宗・天台宗
 各総本山御用達

密教専門仏具店

田中伊雅仏具店

郵便 番号 六〇〇
 京都市下京区万寿寺若宮角
 電話 (〇七五) 三三―二五八四
 五七六〇・四六三〇

第三回 釈尊成道会

東京都仏教連合会

東京都仏教連合会では、十二月八日東京上野不忍池畔東天紅で第三回釈尊成道会にお悟りを讃える集いを開催した。式典に続き、「二十一世紀の人間像」と題して京都鞍馬寺貫主信楽香雲師の講演があり、参会者に深い感銘を与えた。

宗派県・仏人事(就任)

法相宗々務所

管長 高田好胤
事務所一奈良市西ノ京(薬師寺内)

浄土宗総本山知恩院

浄土開宗百年慶典準備局経理部長 関真翁

聖徳宗々務所

宗務所長 栞田秀山
副住職 大野可圓

高野山真言宗々務所

宗務総長 草繁全弘
庶務部長 積秀伝
教学部長 麻生恵光
財務部長 近藤説敵
法会部長 森寛敵
山林部長 高田真光

日蓮宗々務所

宗務総長 片山日幹
総務部長 渡辺公允
財務部長 中野頭文
庶務部長 佐野寿雄
伝道部長 小川英一
教務部長 田中日堂
護法運動本部事務局長 塩田義朗

黄髮宗々務本院

宗務総長 森本三鏡
財務部長 近藤正典
庶務部長 中山通敵
教学部長 鈴木竜珠

聖観音宗浅草寺

執事長 五十嵐亮俊
会計部長 守山良順
本堂部長 峯岸育晋
管財部長 清水谷孝尚
教化部長 塩入亮達
庶務部長 大森亮潮
土地部長 石塚貫雄
幹事部長 清水映順
勸学所長 壬生台舜
寺歴編纂 綱野有俊

阿部龍伝師(真言宗満願寺住職・同派宗機顧問、集議席)

師は、明治三十二年山形県で生まれ、大正十二年大正大学本科を卒業。その後駒沢大学へ内地留学。宗派にあつては、宗務総長、大正大学理事長、全仏の国際、総務局長、事務総長、文部省宗教法人審議会委員を歴任。日本宗教連盟理事、全仏常務理事等在任中であつた。仏教内外で活躍、師の死は各界からおしまれてゐる。六十九才。昨年十二月十一日午前七時十三分慈恵医大で内しゆのため死去。

第九回世界仏教徒会議マレーシア大会日本代表团募集

(マレーシア、シンガポール、インドネシア戦没者慰霊巡拝)

この度、第九回世界仏教徒会議がマレーシアのクアラルンプールにおいて昭和四十四年四月十三日から約一週間開催されることとなりました。

全日本仏教会におきましては、第一回のセイロン会議以来毎回代表团を送つてまいりました。

今回のマレーシア会議にも代表团を送り併せてこの機会にマレーシア、シンガポール、インドネシア各国の戦跡を巡拝し、大東亜戦争に散つた英霊を御回向申上げたいと存ずる次第であります。

世界の仏教徒と友好親善を深め、南溟の涯に散つた英霊を慰めることは、まことに意義あることと存じます。進んで御参加下さることを希望いたします。

記

一、経路

東京(ジャカルタ)バリ島(シンガポール)ペナン(クアラルンプール)東京

二、期間

四月十三日(四月二十四日(十二日間))

三、総経費 二九八、〇〇〇円

(ただし、旅券代、注射代、査証代は含まれていません)

四、申込方法

全日本仏教会国際局へ御申込み下さい。(申込金として三万円を下記にお振込み下さい。残金は昭和四十四年二月十五日までに同様にお振込み下さい。富士銀行東京中央市場支店 全日本仏教会口座)

五、申込締切

昭和四十四年一月三十一日

申込先 東京都中央区築地三十五一

全日本仏教会国際局

電話 (五四二) 〇三三三
(五四二) 二九六九 一〇四